

種智院大學 同窓會報

第2号

昭和63年2月1日

京都市南区壬生通八条下る東寺町545番地
種智院大学同窓会事務局

なつかしき再会



総会なごやかに開催

秋晴れの中の11月17日、同窓会総会が挙行された。既報のとおり、会報創刊号を出発に、同窓会を再び活性化していくための活動が始まり、その具体的な第一歩として、総会が会員諸氏の出席のもとに実現し、母校の現状と将来に目を向け、会員相互の親睦を深めていくことになった。

11月17日は、まず、午前11時からの事務局会議からはじまり、総会にむけての議案等の準備作業を行ったあとで、午後1時から常任幹事会を開催した。ここでは、井上紀生副会長を座長に選出し、事務局の司会のもとで、総会提出の議案について慎重に審議した。とくに、昭和59年以来的の総会ということで、決算報告で、意見交換がなされた。また、次回総会を昭和63年6月ごろとすることで了承された。

午後2時より、物故者慰霊法要に移った。会場の東寺食堂には、仁和寺門跡小林隆仁猊下をはじめ三十数名の会員諸氏が、すでに待機していた。その中を、池田副会長（中山寺長老）を先頭に、事務局員が職衆となり、そのあとに従って入場。池田副会長を導師に法要がすすめられた。さらに嶋裕海氏が廻向文を唱え、物故された同窓会員諸氏に哀悼の意を全員で表し、参加者による焼香を経て、法要は終了した。

法要のあと、総会々場である京都パークホテル

へ移動。午後3時30分より、神戸女子大学助教授藤井利章先生による「日本考古学界の現状」との題で講演を拝聴した。

講演者の藤井先生は、昭和60年に藤ノ木古墳の発掘を担当した中堅考古学者として、学界の注目をあつめている。講演の内容の大略は、モースにはじまる日本考古学界の歩み、そして戦後、在野の考古学者相沢忠洋氏による旧石器（打製石器）の発見など、日本考古学史上にのこる著名な発見を通じて明らかにされた歴史的事実を示し、藤ノ木古墳の発掘の意義を最後にまとめられた。

日頃、文化財と接する機会の多い会員の方々も多く、一同興味深く拝聴したのであった。

講演終了後、ただちに総会に移り、池田堂輝副会長の開会挨拶、さらに麻生文雄学長からの挨拶があり、大学の将来計画への熱き思いが語られた。

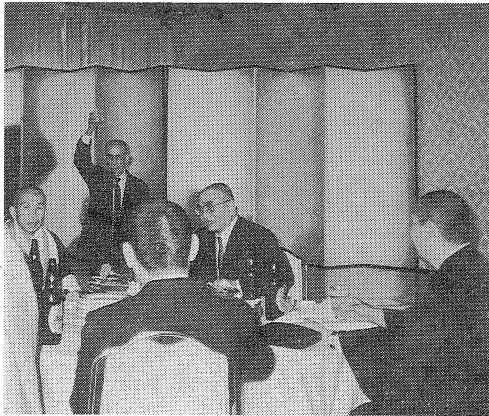
この後、総会の議題審議に入り、井上紀生副会長を座長に選出、昭和61年度までの事業報告、昭和62年度事業計画について、加門得勇常任幹事により報告があり、今年度の事業として、会報第1号、第2号の発行を行い、次年度の総会にむけての準備、同窓会名簿の発行などが提案された。また、昭和61年度までの決算報告、昭和62年度予算について都筑大乘同窓会会計担当から報告がなされ、このあと審議に入った。

審議においては、参加者から活発な意見が出され、同窓会に寄せる思いの深さが如実にあらわれたのであった。具体的には、何故に総会が延び延びになったのか、もっと活発に活動するには、基本から考えなおすべきではないか。あるいは、同窓会名簿には、やむなく中退した人々も記載してほしいなど、議論がわきおこった。

事務局から、同窓会活性化のため、支部結成は第一の活動目標であり、積極的に働きかけていくこと、また名簿作成には、会則にのっとった形をめざしていくなどが確認された。いずれも困難な課題が多いが、同窓会の本来の姿を求めるためには不可欠の要素だけに、協力一致と相互理解を深めていくことが重要である。（2へつづく）

総会ののち、隣接の間で懇親会が挙行された。懇親会のころには、参加者も50名ほどになり、なごやかな雰囲気が、あちこちにできていった。こうした中で、城光寺教進副会長による開会挨拶がおこなわれ、参加者中、最古参の阿部本宣氏（普通寺執行長）の乾杯の発声により、なごやかな懇談がすすめられた。そのあと、あいついで、各地からあつまった方々によってスピーチが行われ、在学中の思い出、現在の活動など、多方面にわたるスピーチに世代を越え、歓談の輪が広がっていた。

そして、名ごり悔しむ声が聞かれる中、蠣田弘教副会長の閉会の辞によって、懇親会はおひらきとなり、次の総会にむけ、一同心を新たにして、会場をあとにしたのであった。



藤井利章先生略歴

昭和19年 大阪府藤井寺市生れ
 昭和44年 龍谷大学大学院修了
 昭和57年 奈良県立橿原考古学研究所第三研究室長
 昭和60年 藤ノ木古墳発掘調査団長
 昭和61年 神戸女子大学文学部助教授
 著者 『藤井寺市史』等

同窓会出席者名簿（五十音順、敬称略）

麻生文雄、阿部本宣、池田瑩輝、池田光輝、市来快延、市橋真明、井上紀生、井上亮淳、今井圓明、岩橋政寛、上原雅明、宇野 惇、大塚聖純、織久寛、蠣田弘教、蠣田安子、蠣田有全、加門得勇、北尾隆心、木村 弘、小西英安、佐藤久光、澤実英、篠畑俊成、城光寺教進、須方智證、杉村圓尚、小林隆仁、鈴木宏教、高井隆秀、武富祐二、田中実道、谷田仁司、玉山順彦、手塚利貞、手島千俊、鳥越正道、新見和言、新田弘美、野口龍弘、野路井宏之、法本弘文、福島仁良、福嶋尊光、福田杲正、前田和連、松尾初子、松木勝彦、宮城洋一郎、宮崎幹大、守安英一、山田達圓、吉田 元、吉田裕信、米岡法輪、鷲尾遍隆

【おしらせ】同窓会四国地区総会

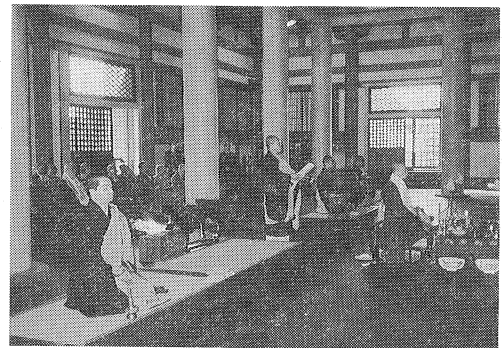
昭和63年2月22日（月）午後1時善通寺において挙行する予定でございますので、四国地区のみならず、近県の会員の皆様方もござってご参集下さい。

物故者慰霊法要次第

- | | |
|-------|--------|
| 1 開経偈 | 1 般若心経 |
| 1 奠 供 | 1 光明真言 |
| 1 廻向文 | 1 廻 向 |

物故者慰霊法要 廻向之文

敬って真言教主大日如来 両部界会諸尊聖衆総じては三世十方一切三宝の境界に白して言さく
 夫れ惟みれば温故知新は人倫の大本、報恩友始は風教の網絡なり 児孫節を選んで先亡の靈を慰め後生忌に因って物故者の冥福を祈り奉る
 本日茲に弔り処の聖靈は種智院大学縁者各靈位兼ねては有縁無縁一切精靈の追福菩提を祈らんが為なり 靈位生前の積徳に因って子孫つぶさに余慶に潤い何をもってかこの高恩に酬いん 依って一座の法筵を設け香花・灯燭に供え回向の法要を修し奉る



願くはこの功德を以って各靈位 仏果弥々増進し真如清浄の月圓に生界の群迷ひとしく光益を被らんことを
 重ねて乞う 今日参詣の諸大徳各位徳報空しからず 家門繁栄・諸縁吉祥ならしめんことを 乃至法界 平等利益
 維時 昭和62年11月17日

護持法主 敬白

ご挨拶

種智院大学長 麻生文雄

私が、学長に就任して早くも一年が過ぎました。

その間、京都の本山の公務、広島 of 自坊の寺務という従来の業務の中に大学の業務が加わり、手帳の予定表は空き時間を探るのが困難になってまいりました。しかし私は、毎週の定例の教授会や部長会を始めとする学内の会議、他大学との連絡会等には努めて出席し、文字どおり学長職一年生の勉強をさせて頂いて居ります。

種智院大学には解決しなければならない問題が山積みされていますが、教育研究の分野では大学の教職員の努力によって逐次検討され一つ一つ改善されて居ります。他方、経営面では大学の教職員の努力で改善策は検討されては居りますが、何分にも問題が大きく難問揃いで、大学の教職員という立場では限界があります。その中でも、大学を取り巻く社会的環境の変化には見過ごし得ないものがあります。

現今、私学関係者の間では『私学の冬の時代の到来』と『私学のサバイバル戦略』という言葉がよく出て参ります。

『冬の時代』というのは何かと申しますと大学の場合の問題点は、①昭和67年度をピークに大幅に減少する18才人口②進路の多様化及び青年層の意識変化による大学進学率の低下③私学への国庫補助金の削減——以上の三つの要素が重なり合っ て参りますので、幾つかの大学は、学生が集まらず、経営が不可能になり、閉鎖（倒産）するところが出てくると予想されています。また国公立の大学を含めて多くの大学は学生募集に躍起になり、それでも定員を充足するのが難しく、所謂、赤字経営になるという、私学経営の非常に困難な時期に遭遇しようとしています。これを『私学の冬の時代の到来』と表現しております。

全国の18才人口は62年度現在188万人、それが67年度には205万人になるそうで、これが現在の高校生急増期といわれる現象となっていますし、大学生急増期の波に繋がるものであります。それが、その5年後の69年度には168万人となり、一年間に7.5万人の割合で減少していくそうです。9年後の73年度には149万人となり、以後140万人台を推移すると人口統計が出ており、大体、ピーク時の三分の二になるということでもあります。

一方、専修学校や専門学校の社会的評価の定着と、マスコミに取り上げられる大人になることの出来ない大人（「ピーターパン・シンドローム」）の増加や、漠然とした不安から義務・責任を持つことを回避しようとする現象（「モラトリアム現象」）の増加。このような状況は、結果として大学離れを助長することはあっても、大学進学率を伸ばす要因には成り得ない訳であり、現在の大学・短大等進学率約47%が、55%や60%になるような大幅な伸びは考えられないのであります。

61年度188万人の18才人口で46%の進学率、約87万人の志願者に対しての大学・短大入学者は64万人ということであり、需要が供給を上まわっているといえます。それがその後の定員増加や新設校も加えると70万人は収容可能と言いますが、140万人の18才人口であれば進学率を50%と多めに見ても、大局的にはほぼ全員が大学に入学出来るということになります。

需要が大幅に上まっている現在でも、定員割れして学生の集まらない大学・短大が多数有ると聞いております。まして需要と供給が拮抗した時、実際には全国で数多くの大学・短大が多数の欠員を生じさせることになり、経営の危機を迎えることは火を見るよりも明らかといわなければなりません。そのような厳しい環境のなかで私学はまさしく『生き残り作戦』を検討しています。それが『サバイバル戦略』といわれるものであります。

かかる時期に際しまして、宗祖弘法大師の建学の精神にもとづく宗教的人間教育の確立、並びに現代に生きる大学として宗内外の様々な社会的要請に応えるため、昭和60年より、来るべき二十一世紀に飛翔する種智院大学の未来像を考え、さらなる発展を期すために、『今何を為すべきか』を全教職員で検討し続けてまいりました。

その結果、第一段階として、現在の校舎の北側にもう一棟校舎を増築することで、教育研究活動の最低の基盤を確保し、密教・仏教の専門科目の充実を計るとともに、福祉専門学の社会への適応力を強化することを眼目としております。そこで内に力を蓄え、個々の専門の学科への昇格・独立を新たなる展開として計画しております。

この問題の解決のためには当事者の努力は勿論、どうしても莫大な費用が必要とされるわけでございます。皆様方の熱烈な御指導と御協力、力強い経済的御援助を、是非お願い申し上げます。存ずる次第でございます。

【大学だより】

昭和61年度 卒業論文題目

仏教学コース

織 久寛 蓮如と一向一揆
松尾 力 後期インド佛教の図像観

密教学コース

大台 一郎 役の行者伝説の考証
川村 宗紀 中国における施餓鬼会法の流布
喜多 秀海 興教大師の阿弥陀観
近藤 昌信 大日経における灌頂について
坂本 省三 密教と禅の芸術
里村 正 叡尊の社会活動について
高橋 悟道 大日如来像の展開
中村 倫明 密教とキリスト教の比較
新川 健二 顕密劣勝論
西田 義広 真言密教に於ける馬頭観音について
の一考察—特に信仰を主眼として—
林田 修一 歓喜天信仰の起源
山口 光玄 興教大師の密厳院発露懺悔文
山下 英一 十住心における三世無障碍智戒の位置
山本 純真 即身成仏義の四種曼荼羅
取鳥 和博 熾盛光御修法について

仏教福祉学コース

天野 智之 社会資源としての寺院の位置づけについて
加藤 隆三 現代の非行問題—学校教育と少年非行について—
武富 祐二 障害者(児)福祉についての一考察—聴覚障害(児)者に対する福祉の在り方—
忠海 孝司 量的拡大傾向にある老人の介護のあり方—痴呆性老人の問題を通して—
中西 克仁 これからの社会福祉を考える
細川 和夫 在宅老人サービスに関する一考察—老人保健施設としての中間施設のあり方—
梶家 佐知 “いじめ”に対する学校福祉—数々の「いじめ」事件を通して—
本谷 壮 在宅老人福祉の研究
守山 博敬 現代の児童問題—いじめっ子に対する福祉の在り方—
山下 俊彦 在宅障害者福祉のあり方
山本 鶴司 児童福祉の現代的意義—非行と自殺—
酒井 昌幸 老人サービスに関する一考察

永島 達司 高齢化社会における老年期

◎学 業 賞 天野 智之
◎論 文 賞 細川 和夫
◎玉 蔵 院 賞 山下 英一
◎六大新報社賞 松尾 力
◎高野山出版社賞 加藤 隆三

学内研究発表会 (昭和62年11月27日午後1時より)

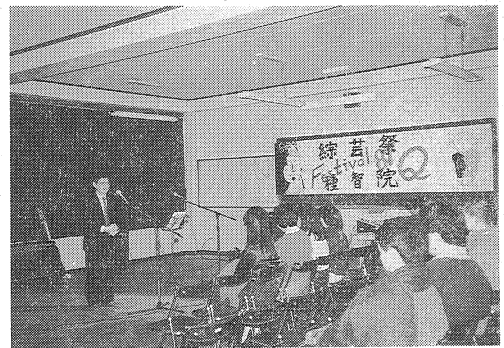
研究発表者及びテーマ

- 1、社会福祉の専門性について
教授 福田 泉正
- 2、大門寺一切経願主経尊について
講師 添野 智讓
- 3、『妙法華』における「大乘」の語について
教授 荻谷 定彦
- 4、東寺三宝の研究—とくに頼宝について—
宇垣 泰明

学園祭無事終る

綜芸祭実行委員長 山本 宏 嗣

先輩方より引き継いでできました学園祭を、より発展させるために本年度より新たに「綜芸祭」と命名し11月20、21日に第1回目を無事終えることができました。綜芸祭の内容としましては、校舎を五色のイメージで内装し、講堂に於いて映画『空海』の上映、吉本興業漫才師「ザ・バッテリー」による寄席、他の教室ではクラブを中心とした展示・発表等を行いました。私達は綜芸祭が大学を発展させる活力の場となるように今後一層努力していきたいと思っています。



編集後記

会報第二号をお届け致します。第一面にて述べましたように、総会では、数々のご意見が出、大変なもり上がりとなりました。これひとえに同窓生の皆様方の熱い思いと、母校へのひたむきな心情のあらわれであります。このエネルギーを同窓会活性化につなげるべく、今後も一層精進したいと思います。